

## 復樂園としてのイギリス

ハートリブ・サークルの庭園論における活動・改良・拡大 (1640-60年)

安西 信一

いわゆる「イギリス式庭園」ないし「風景式庭園」は、18世紀初頭、従来壁に閉ざされていた庭園を、外部の自然へと開くことで誕生した(安西「立憲君主制」, 「〈開かれた庭〉の終焉」)。この新様式を推奨する Switzer は、1715年、前世紀の庭園史を総括している。

[チャールズ1世の治世(1625-49)以降,] 神学者, 哲学者, 全身分の者は, 書物を捨て, 国内の騒乱に巻き込まれていった。護国卿を僭称する者〔クロムウェル〕の略奪では, 木を切り倒す方が, 植林しそれを修復するよりも世の習いとなった。この悲惨な幕間にあつて, それ以外望むべくもなかった。自然と政府の法は常に混乱し, 宗教の聖なる名の下, 想像できる限りの墮落と荒廃が行われたからである。……幸い1660年, 王室が復興されるや, 植林は打ちすえられた頭をもたげ始め, 同じ御世において, 造園の予備的な礎が置かれた。これが現代に至り, かくも見事な高みに達したのである。(Switzer I, 50, 52)

ピューリタン革命期(内乱・共和国時代: 1642-60)は庭園破壊の時代であり, 造園は1660年の王政復古で再興, やがて風景式庭園の出現をもたらす。——こうした「勝利者史観」とも呼ぶべきものは, 当時の庭園論的言説のみならず, 現在, 17世紀イギリス庭園史の最も基本的な研究とされる Strong の *The Renaissance Garden in England* (1979) にも見られる常識である<sup>1</sup>。

あらゆる常識同様, これも完全な誤りではない。しかし近年明らかにされたとおり, 革命期にも相当の造園が行われ (cf. Mowl), 斬新な庭園論が多数書かれた。否, もしもピューリタン革命が, しばしばいわれるように「千年王国」革命であり(田村【千年王国】; 岩井), 地上における「神の楽園」の再興を目指したのだとすれば, 革命期こそ優れて〈庭園の時代〉であったとせねばならない。

本稿は, ピューリタン革命期を単なる庭園破壊の時代とする常識を修正すべく, 特に当時の庭園論に注目する。具体的には, 王政復古以降忘れられる Hartlib と彼のサークルの庭園論的言説を取り上げたい。以下まず, ハートリブ(・サークル)の重要性と基本的指向性を概観し(第1節), 次にそこで庭園がいかなるものと見られたのかを探る(第2節)。最後に, 中でも革新的な Beale の庭園論を検討する(第3節)。それにより最終的には, 自然へと〈開かれた庭〉, 風景式庭園に至る重大なモメントが, この時期に提出されていたことを示したい。

## 第1節 公共善へ向けて——ハートリブのシヴィック・ヒューマニズム

イギリス人を母としてポーランド領プロシアに生まれたハートリブ (Samuel Hartlib, c. 1600-62) は、後年イギリスに渡り、ピューリタン革命期における教育改革、プロテスタント統一運動、科学革命の要石となる<sup>2</sup>。 *Of Education* (1644) をハートリブに捧げた Milton はいう。「[ハートリブは] 何か神の摂理により遠い国からイギリスへ送られ、この島に大きな善をもたらし鼓舞した」 (Milton II, 363)。なるほどハートリブは、王政復古と同時に世の寵愛を失い、忘却の彼方へ葬られる。しかし近年、とりわけウェブスターの研究と<sup>3</sup>、膨大な遺構集 *Hartlib Papers* の公開により<sup>4</sup>、イギリス科学革命史を塗り替えるともされる彼とそのサークルの重要性が認識されてきた。その結果例えば、Boyle, Newton, 王立協会に代表される王政復古以降のイギリス科学が、宣伝者たちの主張にもかかわらず、ハートリブを中心とする革命期の科学運動に多くを負うことが改めて明らかになっている<sup>5</sup>。そして当時の名だたる庭園論者——Austen, Cowley, Evelyn, Marvell 等——も全て、ハートリブの友人、文通相手、賞賛者であり、その研究の多くはハートリブの支援によっていた。

尤も、ハートリブ自身は多くの著作を残しているわけではない。彼はむしろオーガナイザーないし編集者的存在であり、前記【ハートリブ文書】等に見られる広範な文通（遠くアメリカにも及ぶ）と出版の企画を通じ、多様な研究者を紹介・支援した。ハートリブ自身、次のように述懐している。「神の摂理は私に命じ、他の人々の経験〔実験〕と観察に関する様々な改良を行わせた。私はそれらを公共 (the *Publick*) へと伝える導管 (conduit-pipe) にならねばとおもう」 (Weston [A4r] : 強調原文, 以下同)。

この引用にある「経験」「観察」「改良」「公共」の語は、ハートリブの基本的方向をよく示すものといえる。すなわち公共への奉仕と、単なる思弁的な〈観想的な生活〉でなく実践的知識と改良を重んずる、ベーコン的活動主義である<sup>6</sup>。こうした言説——権威におもねず公共善に参与する〈活動的な生活〉を最も重んずる言説を、広義の「シヴィック・ヒューマニズム」と呼べば<sup>7</sup>、それはハートリブと彼のサークルの全活動を支えていた。彼は同様の主張を随所で繰り返すが、それはすでに処女作 *Macaria* (1641) にも顕著に見られる。同書はハートリブ自身、以後の活動の綱領と見做したものである (cf. Webster, *Hartlib* x)。それを一瞥し、彼のシヴィック・ヒューマニズム的指向性を概観したい。

More の *Utopia* (1516) に現れる架空の地、「マカリア」(「至福の地」の意) を表題にしたこの書は、Bacon の *New Atlantis* (1627) をもモデルにしたユートピア文学である (Hartlib, *Macaria* 80)。しかしそれらよりも一層具体的「改革」(Reformation) の提言に満ち、実際、開かれたばかりの長期議会 (1640-) に向けて書かれた。ハートリブによれば、マカリアは「人々が大変な豊穡、繁栄、健康、平和、幸福の内に暮らす」(81) 理想郷である。

とはいえ彼の力点は、完成した至福の状態の記述ではなく、むしろ現実のイギリスをマカリアに変えよという活動・改良の呼びかけに置かれる。「なぜイギリスの全住民は、一つになり、この国をマカリアのようにしないのか。マカリアは多くの人民を持ち、財宝と軍備が豊かなので、征服されることはないのに」(88)。その結果同書には、「プロテスタント的労働倫理」あるいは「ブルジョア的エートス」とも呼ぶうる活動・改良主義が溢れることになる<sup>8</sup>。例えば、「近隣諸国はイギリス人を怠惰な国民と呼び喜ぶだろう。しかし〔イギリス人の〕大部分は、自分の善を棄えている」(90)。そしてハートリブは、「勤勉な者なら誰でも富むことができる」よう改良を提言するのである。重要なのはこの活動・改良主義が、「千年王国論」に支えられていることであろう<sup>9</sup>。

なるほど我々の行おうとしている改革が、最後の審判の日以前に来ないと考える神学者は多い。しかしそうした改革が、最後の審判の日以前に来ることを明確に証す聖書のテキストなら百も挙げられる。……それゆえ、急ぎ我々の良き意図を追求し、この改革の業に仕える道具となろう。(89)

また同書においてハートリブは、自分が実際に出版させた書物<sup>10</sup>を議会に提出する旨を述べるが、彼の出版活動が以上のようなシヴィック・ヒューマニズムの精神に貫かれていたことは、次の引用文によっても示される。「出版術が知識を広める結果、一般の人々は自己の権利と自由を知り、圧力では支配されないようになって<sup>11</sup>、あらゆる王国は少しずつマカリアのようなろう」(89)。そしてこれらの活動・改良全ては、「公共善」(the pubicke good) に奉仕すべきことが繰り返される。ハートリブによれば、「我々の全ては、神と自然の法により、公共善を増大させるべく定められている」(88) のである。

こうした公共善へ向かう活動を最優先するシヴィック・ヒューマニズム——千年王国論および「ブルジョア的」経済利益の追求と融合した<sup>12</sup>——は、イギリス共和国(1649-60)において一つの完成を見る。ハートリブは、共和国時代に出版した書物でいう。

これまで私を支えてきたのは、公共への愛のために善を行う喜びであった。……近年、この国を共和国の形で定着させることにより、全ての人々が一致して公共に奉仕するための門戸を従来にもまして開き、それによって自分たちの福利を守ると同時に増やすことが、神のみ心になかった。(Weston A2v)

実際、ハートリブらの活動はピューリタンの共和国政権に認められ、彼は政府に登用されて、様々な教育・通信・行政改革を提言してゆくのである。

ただし勿論、彼とそのサークルは、レヴェラーズやディガーズのような急進的ピューリタンだったわけではない<sup>13</sup>。むしろハートリブらは、ピューリタンの偏狭をできるだけ越えようと

した。そうした党派性こそが、悲惨な内乱（1642-49）をもたらしたからである。この内乱の荒廃を、「公共の普遍的利害」（Child [B3r]）への奉仕によって癒すこと。それが彼らの研究・出版の目標であった。ハートリブは自ら出版を企画した書物の序でいう。

雇用がないせいで、職業が衰え貧民が増すという不平が広く聞かれる。この不平は、内乱とこの国が自ら被った動揺からすれば、当然の帰結であり結果にすぎない。それを癒すことは万人の願いであろう。誰しも公共の災難を和らげるべく貢献したいとおもう。……今や〔共和国が確立し〕、我々が公共の安定を手にする希望が高まった。それに促されて、私は〔本書の諸提言を〕公にするに至ったのである。（Dymock, *Reformed* A2r; cf. *ibid.* 5f.）

そもそもピューリタン革命の主流自体、内乱が終わり共和国時代に入ると、過激な党派性を捨て保守化する。ハートリブはすでに内乱前の『マカリア』において、「個々の臆見やセクトばかり気にかけ……分裂と異端を助長する」宗教を批判していた（*Macaria* 85; cf. *Plattes* B2r）。事実ハートリブ・サークルには、ビールやイーヴリンといった国教会派・王党派も含まれている<sup>14</sup>。それどころか、彼らの活動は余りに超党派的だったため、党派性を露にしないことが時間稼ぎと見做されたこの時代にあつては、猜疑の目で見られることにすらなる（*Webster, Hartlib* 26）。

それゆえ、内乱と党派性に引き裂かれた時代に生きるハートリブらにとって、シヴィック・ヒューマニズム的な公共善の追求は、切実な現実味を持っていたというべきであろう。彼らが繰り返し説くところによれば、人は「私的利害」（private Interest: *Weston* A3r）への閉塞を破り、公共善へと開かれねばならない。ハートリブは訴える。「我々を惨めにするのは、心の狭さ（*Narrownes*）に他ならない。己を越えて心を広げよう。心を開き（opened）、公共の関心事において皆が互いに有益となるため神が与える便宜を受け入れよう」（Dymock, *Advancement* Ar）。

## 第2節 農業と耕地の改良・拡大によるイギリスの楽園化

このハートリブ・サークルにおいて、庭園はいかなるものとして見られたのか。

まず以上から予想されるように、公共善へと〈開かれる〉ことを強調する彼らのシヴィック・ヒューマニズムにあつては、伝統的な〈閉ざされた庭〉（*hortus conclusus*）の類型<sup>15</sup>は、私的利害への閉塞を象徴するものとして否定的ニュアンスを帯びうる。実際、ハートリブ宛の書簡（1640）には次のようにある。

かくも公共的で、選り抜かれ、優雅な精神の持ち主は少ない。ああ悲しむべきことに、我々は己

と己のもののみを求める。彼らと彼らのものではない。或る意味で我々は、閉ざされた庭、ないし封ぜられた泉 (a garden inclosed, or a fountaine sealed) のように、己が寝そべり休むことができそうな己の船室のみを気にかける。実際には、船全体が波をかぶり危険だというのに。  
(‘Woodward to H.: 19 Feb. 1640,’ *Hartlib Papers* 34/1/1A)

「閉ざされた庭」「封ぜられた泉」とは、聖書『雅歌』4・12に現れる言葉であり、一般に聖母マリアを指すと解釈された。それは一七世紀初頭のイギリスでも依然賞賛されたが、しかし今や、公共善に対する顧慮を欠く、私的利害への閉塞を示す隠喩となっている。

これに反し理想の庭園は、公共善へと開かれた有用なものでなければならない。そこで多くの場合庭園は、園芸や植林を含む広義の「農業」(Husbandry) に包摂されることとなる。すなわちハートリブの出版した農業書を見ると、例えば *An Essay for Advancement of Husbandry-Learning* では、庭園の建造は端的に「善き農業」の一部とされる (Dymock, *Advancement* 2)。また有名な *Samuel Hartlib, His Legacie: Or An Enlargement of the Discourse of Husbandry* (1651) でも「造園」(Gardening) についての節が設けられるが、これは野菜の栽培に他ならない (Child 9f.)。

この広い意味の農業——ハートリブは「普遍的農業」(Universall Husbandry) という言い方も用いる (E.g. Child タイトル) ——は、一国全体の要、全学問・全職業の統一的基礎とされた。前節で引いた公共善を説くハートリブの言葉の多くが、農業書から取られていたことにも注意しよう。彼はいう。「農業は或る共和国に属する勤勉のうち、最も高貴かつ必要な部分をなす。農業は人々の交易を支える第一の基盤、あらゆる秩序立った社会における富の源泉である」(Weston A3v)。それゆえ、「農業は世の中のあらゆる身分の人々が目指す目標」(Child B4r) でなければならない。更にハートリブは、当時しばしば提言された農業大学の設立について述べる。

他のあらゆる職業と科学において、大学と協会は (正しく整えられれば) それに従事する人々の才能を改良するのに著しく有利であったし、今もそうである。ならば、他のあらゆる職業と科学的勤勉の母である農業の科学と職業において、その技を大学で教えることが、無限の有用性をもたないわけがあるか。(Dymock, *Advancement* [A2r-v])

この引用文は、農業の中心性のみならず、ハートリブ・サークルの農業＝庭園論全体のテーマをよく伝えるものといえよう。常に強調されるのは、「勤勉」「改良」「有用性」であり、先に見たようなプロテスタント的労働倫理とペーコン主義に支えられた活動・改良である。とりわけ農業や土地の「改良」(Improvement) は、18世紀の庭園論に受け継がれる鍵概念となる。事実『彼の遺産』でも、「造園は土地の素晴らしい改良者である」(Child 8) と直裁にいわれ

ていた。しかもこの改良は、「大学」を初めとする社会・教育制度の改革と連携せねばならない。恐らくそうした制度的関心を最も顕著に示すのは、ハートリブの出版した *A Designe for Plentie* (1652) であろう。そこでは、例えば次のような法律と官吏が提言される。

貧民救済、金持ちの利益、万人の喜びとなるような……有益な植物の一般的・普遍的な植林を目指した法律を、何らかの権威によって作り施行する。……各町に2名の官吏を任命し（「果樹官」、「樹木官」、ないし類似の名で呼ぶ）、毎年特別に選定する。この官吏には、上記の割合の樹木を植林し、注意深く保護することを監視する権限がある。そして不履行者には罰金を課し、それを公共の使用に供する力を有する。(Anon. 4f.)

こうした制度に支えられ農業改良を重ねれば、やがて貧民と荒野は消え、公共善は増し、終にイギリス全土は、原罪で失われた「<sup>パラダイス</sup>神の庭園」「楽園」の姿を取り戻すであろう。この広義の千年王国論的な構想——改良によりイギリスを再興された楽園にするという構想は、ハートリブ・サークルの農業＝庭園論にしばしば登場する<sup>16</sup>。それはすでに【マカリア】にも現れる（その千年王国論一般については上述）。すなわち理想郷マカリアにも「農業審議会」(Counsell of Husbandry) なる制度が設けられるが、その「命令で、物故者の財産の二十分の一は土地改良、公道の美化、橋の建設に用いることとした。その結果、王国全体は豊穰な庭園のようになったのである」(*Macaria* 82)。同じ構想は、十年後の【豊稷の計画】でも繰り返される。

〔この改良〕から生ずる喜びと快は、しばらくすれば少なからぬものとなる。そのとき荒れた粗野な場所は、全て秩序と距離を保つ果樹で溢れ、神の庭園のごとくになる。各々の木は、乾きを癒し精気を回復する食物を疲れた旅人に提供する。そして彼に、木陰で休み、美味を楽しみ、金を節約するよう招く。(Anon. 10)

いい換えれば、この楽園と化したイギリスでは、各庭園は外部の来訪者に閉ざされていない。つまりハートリブ・サークルの改良主義は、単に庭園を隠喩的な意味で公共善へ開くのみならず、文字どおりその境界を外部に開き、終にはイギリス全土へ広げる拡大主義につながりうる。ここに、開かれた風景式庭園へと向かう重大なモメントが提出されたといえよう。

尤も例えば上の引用文から、ハートリブ・サークルの目指した復楽園としてのイギリスが、共産主義的のコミューンであったと想像してはならない。むしろ彼らは、レヴェラーズやディガーズといった急進派への反動もあり、土地の私的所有を肯定し、入会地の「<sup>エンクロージャー</sup>囲い込み」を積極的に擁護・推奨した。例えば、彼らの中で最も急進派に近かったと思われるオースティンですら、囲い込みこそがイギリスを神の庭園にするという。

囲い込みによって、多くの荒蕪地や入会地 (*Wast and Common Grounds*) は、今よりずっと有利に改良できよう (その荒蕪地を所有する領主にとっても、そこに利害関心を要求する他の者たちにとっても)。……我国は悦楽の庭園そのもの。洒れることのない井戸。ならばこの国の不毛な荒蕪地が、立派な果樹と他の益あるもので満ちるとき、この国を新たな約束の地 (*Canaan*) と呼べないわけがあるか。(Austen, 'The Epistle Dedicatory: To ... H.' ¶12r-v.)

一般にハートリブ・サークルの農業書は、「囲い込みに対してなされる通常の非難」(EI 59) を踏まえ、それを再反論するものが多い (E.g. Blith 88ff. *et passim*; Child 13, 42)。そして急進派のような平等思想を説かず、むしろ身分と土地の不平等を不動の前提とする (e.g. Blith A3vf.)。例えば『彼の遺産』にも次のようにある。

この巧みな天職〔造園〕の進歩に関し私が望みたいのは、以下のことだけである。すなわち勤勉なジェントルマンたちが、自らの居所に専門労働者を喜んで導入し、土地を安値で貸し与えること。その労働者が貧乏で正直なら、若干の資産を貸与することである。そうすれば紳士たちは、自分のみならず隣人の利益も増加するのを見るだろう。特に貧民には益がある。貧民は、造園家の労働と巧みに支えられるところが少なくない。(Child 10)

確かにここには、底辺にいる貧民を造園によって救済する姿勢が見える。そして貧民救済は、ハートリブ・サークルの庭園＝農業書のみならず、ピューリタン革命の最重要課題の一つであった (cf. Plattes [c4v]; Child 42; Todd 133-48; 竹内; 田村『ユートピア』44-49)。しかしここで「紳士」の土地私有、あるいは彼と貧民との不平等といった社会秩序の転覆は目指されていない (この意味でもハートリブらは、現状維持的な王政復古期の先駆である)。

しかもこのことは、自然へと開かれた風景式庭園に至る目的論からすれば、或る種の障害となる。すなわちハートリブらは、なるほどイギリス全土の樂園化を説き、その意味では〈開かれた庭〉を構想した。しかしその手段は、荒野を「囲い込む」ことなのである。むしろそれは彼らの活動・改良・拡大主義と矛盾しないし、彼らの庭園論が多く農業論であったことの当然の帰結ともいえる。しかしそのゆえに却って、彼らは開かれた手付かずの自然 (荒野) の快を見失っているように思われる (例えば上の『豊稔の計画』でも、一大樂園と化したイギリスは、「荒れた粗野な土地」がなく、果樹が「全て秩序と距離を保」った厳格な整形庭園であった)。そうした快が前面に現れるには、王制復古を待たねばならないであろう。ただしほとんど唯一の例外といえるのが、次に見るビールの庭園論である。

### 第3節 半世紀前の風景式庭園論——ビールの〈開かれた庭〉

ハートリブ・サークルの中で狭義の庭園論をものした最も重要な論者を挙げるならば、互い

に親交の深かった二人の王党派、イーヴリンとピールになろう。前者は王政復古後も王立協会  
の中心メンバー、また *Sylva* (1664) の著者として長く名を残す。彼については別に述べたい  
(安西「シヴィック・ヒューマニズムとエピキュロス主義」)。ここでは現在ほとんど忘れられ  
ているが、実はイーヴリンの源泉ともいえるピール (Rev. John Beale, 1603-82) の庭園論を  
検討する (cf. Stubbs)。以下明らかになるとおりそれは、風景式庭園の最初の提唱者アディソ  
ン (cf. 安西「立憲君主制」) に半世紀先立つ、一種の風景式庭園論であった。

ピールの庭園論が忘れられた最大の理由は、その主な部分が出版されず手稿のまま留まった  
ことにある。しかし当時公刊された彼の著作からも、その斬新さは伺えよう。例えば  
*Herefordshire Orchards, A Pattern For all England* (1657: ただしこれも匿名) には次の一節  
がある。

地面が極めてでこぼこな (unequall) 場合、それを水平にする (levell) のは大変な出費、愚劣  
な虚栄心の証左にすぎない。荒野 (wilderness) にも一種の美があり、確実に気分を爽やかにす  
るからである。水平 (equality) によるより、でこぼこ (inequality) による方が、恐らく一層優  
れ、温和で、実り多く、多様性に確実に適し、季節のあらゆる変化にかなう。そうした土地は自然  
のリングに一層適する。自然のリングは、自己の本性的 (naturall: 自然な) 行き方を妨げられ秩  
序へ強制されると、虐待され、不具にされ、傷つく。(Beale 45)

ここには、自然へと開かれた風景式庭園に通ずる新たな指向性が見られる。すなわちピールは、  
所与の自然の美や多様性を称揚し、人工的強制を非難する。なるほどここにベーコンや、こと  
によるとマーヴェルのエコーを聴き取ることは可能であろう<sup>17</sup>。しかし例えば「荒野にも一種  
の美がある」といった言い回しは、風景式庭園に影響を与えた一人として引かれる後の  
Shaftesbury の、「荒野も喜びを与える」という言葉を彷彿とさせるに十分である (cf.  
Shaftesbury, 'The Moralists' [1709], pt. 3, sect. 1: II, 388)。

更に穿って読めば、この引用文には、「カントリー」に住む保守主義的な国教会聖職者ピール  
の、イデオロギー的メッセージが隠されているとも思われる。なるほど彼は、文字どおりには  
土地を「水平にする」(levell) ことを非難しているにすぎない。しかしこれは、ピューリタ  
ン急進派「レヴェラーズ」(Levellers: 水平にする者) が、社会の「水平=平等」(equality)  
を求めたことへの非難とも読める。そうであるならばこの一節は、先に見たハートリブ・サー  
クルの現状肯定と合致するのみならず、同じくヘレフォードシャに住み自らの地所で造園を行っ  
た、後のピクチャレスクの理論家 Price による同様の主張と、一世紀を隔てて響き合うことにな  
る。すなわちプライスは、土地の高低等、様々な「区別」(=差別: distinctions) を無み  
する造園と、フランス革命の無政府主義とを重ね、両者を「水平にするもの」(leveller) =  
「レヴェラーズ」の名の下に断罪したのである (Price 28n.)。



いずれにせよ、一層斬新なビールの発言は、むしろ『ハートリブ文書』に収められた彼の遺稿に見られる。そこには、革命期のハートリブ・サークルには珍しく、狭義の美的庭園に関する発言が多く含まれている。

例えば、*A Garden of Pleasure* という実現しなかった書物の構想を語りながら、ビールは後の風景式庭園論の核となる幾つもの主張を先取りする。特に以下の章が提案される点は注目に値しよう。

第二章 もともとの土地 (platforme) を特殊な空想 (phantsy) に合うよう強制してはならない。そうではなく、その場所の自然に合致する最良の形をそれに与えなくてはならない。

第三章 パラドックスを仄めかすことで次のことを示す。すなわち、最も不完全な形が、芸術と想像力の神秘によって最も優美な装飾となり、庭園に最も適したものとなること。

第四章 不要な出費をたきつけないう助言する。……

第六章 自然の産物の方がふさわしい場合、いかなる箇所でも芸術〔人工〕による管理と抑制を離れるべきか指示する。これは Sir Philip Sidney の綺想により確証された。

第七章 Sir H. Wotton の綺想を追究し解明する。すなわち、建築物が規則的であるべきなのと同様、庭園は不規則的か、ないし極めて粗野な規則性のうちに置かねばならない。('Letter to [H.],' 1657-59?, *Hartlib Papers* 25/6/3A-B)

所与の立地場所の自然に合致し、穏当な出費で造られ、時に芸術の支配を離れ、「最も不完全な」形と不規則性を備えた庭園。——もしもこの書物が実際に書かれていたら、一八世紀のものといっても通ったであろう。事実それが斬新だったことは、「パラドックス」や「綺想」の語が示すとおりである（ビール自身は、独創の功をシドニーとウットンに譲っているが： Cf. Sidney 139； Wotton 109, 79）。

とはいえ我々にとって一層重要なのは、ビールが別の遺稿で、〈開かれた庭〉の構想を打ち出していることであろう。すなわち彼は、恐らくイーヴリンに宛てた手紙 (30 Sept. 1659) において、ヘレフォードシャに現存する自然の山全体を、一大庭園と化す構想を述べる。この注目すべき一節は十分知られてきたとはいいがたい<sup>18</sup>。若干長く引用しよう。

……私の異説 (Heterodoxe notions) を説明するため、近所の小地所を取り上げたい。……これは一般に年百ポンドの土地とされる。ここに私のパラドックスがある。もしもその周りある年百ポンドの土地も一緒に選び、両者を足せば（しかもこれはほとんどその年百ポンドだけで着手できる）、それを（現状でも）わずかに百ポンドでもって、貴殿が挙げる現代の立派な (Princely) 多くの庭園より美しい庭園にできよう。……ここで周囲の状況 (the neere situation) にどれほど助けられているか考えてほしい。この山は巨大な高さである。何百万という人と金をもってしても、これほどの山を築くのは難しい。登るには幾つか道がある。急傾斜のものもあれば、湾曲しもっと緩やかなものもある。……好みに合わせ真直ぐ登っても、緩やかに迂回してもよいよう選択を変えられる。……丘の頂上には……四方を厚い椋の茂みで囲われた、平たく極めて広い緑の四角い広場があ

る（イーサンの庭園と呼ばれる）。……この庭園から1ファーロングのところ、イーサンの穴というとてつもなく恐ろしく深い崖がある。それ越しに貧しい谷を眺望できる（貧民の小屋がたくさんあるので窮乏の谷という）。眼下には森に覆われた低い丘がいくつも見える。……どうか以上に気を留めてほしい。この神秘を理解する人は今日少ないからである。当の庭園から望める他の眺望は、全てこれとは極めて異なり、ワイ、ルーグ、フロメイといった河越しに、豊かな谷や森に覆われた丘が見える。この四角い広場〔イーサンの庭園〕は、すでにボーリング用芝地に十分なほど滑らかで、古の花の庭園と完璧に似ている。……丘の麓に屋敷がある。以前は寺院だった。丘の中腹から清冽な水が湧き出す。その水が自然の流れを伝い屋敷の中を運ばれ、ついで家を囲む堀となる（これは嫌いである）。更に庭園と野原へ抜けるのだが、必要以上にそこに留まらない<sup>19</sup>。屋敷は極めて快い川岸沿い豊かな牧草地へと至る途中にある。そこに花壇（Viridaria）が備え付けてある。川沿いに行くには、耕地か、果樹園か、牧草地のいずれかを選べる。つまり緑の上か、木陰か、開けた場所かである。……私はこの全体を庭園とする（I designe the whole for Garden）。……

以上で示したかったのは、心の狭い一部の人々が、いかに自分の幸福を理解しないかである。確かに貴殿の書物<sup>20</sup>により、何かの仕方では非常な利益を得る者もいよう。ただしそれは、優れたものの破壊を控えるよう指示する限りにおいてである。こうした崖を埋め台なしになる人もいれば、財産を投げ打ち丘を築く人も知っている。しかしその丘たるや、上のものと比べればモグラ塚に過ぎない。……無理やり平地にして台なしになる人もいる。しかしそこで優れているのは、彼が作ったものではなく、最初に見出したものなのである。（*Hartlib Papers* 67/22/2B-3B）

ここでも、先に見たビールの主張が繰り返されている。例えば豪華を避け、出費を押さえた庭園。所与の自然の尊重。地面を水平にすることへの非難。また18世紀の風景観を先取りした箇所も多い。特に崇高美学を彷彿とさせる「とてつもなく恐ろしく深い崖」。多様性、湾曲への好みは、不規則性へのロココ的嗜好（Hogarthに結実する）を思わせる。複数の道を自由に選べることも、後の庭園論では重視される。

しかしなかならず留意すべきは、一種の〈開かれた庭〉が提唱されていることである。これは所与の自然の尊重と重なっている。すなわちビールは、人工による自然破壊を戒め、造園者が「最初に見出したもの」「周囲の状況」への顧慮を説く。そしてそのことは、自然の山と麓の屋敷、耕地や牧草地といった付随する土地（ことによると遠くの眺望）の「全体を庭園と考える」ことに他ならない。つまり彼は、従来の「心の狭い一部の人々」のように庭園を閉ざす、それを周囲の自然へ〈開く〉ことを提唱しているのである（彼が家を「囲む」堀を嫌っている点も注目される）。しかもそう考えることは「異説」（あるいは「パラドックス」）であり、「この神秘を理解する人は今日少ない」。いい換えれば、この〈開かれた庭〉の提唱は斬新であることが自覚されてもいる。これを半世紀前の風景式庭園論と呼ぶことは妥当であろう。

更にビールは、ハートリブ・サークルの他の論者同様、イギリス全土を再興された「神の庭園」「楽園」に化すという千年王国論的構想を繰り返す<sup>21</sup>。しかもその彼の主張には単なる修辭を越えた現実味がある。

もしも妻や主婦たちが、夫の行う田園の化学〔土地改良〕に対抗し、家の茂みを、キイチゴ、スグリ、グズベリー〔等〕……に変え、更にマーマレード、キドニー、ワイン、蒸留酒や有用な液体に変えるなら、通り掛かりの人は皆、それを至福の地と認め賞賛しよう。そこにおいて原罪はくつがえされる。これを行う人々に対してこそ、神は荒野を飾り樂園に変える知恵を授けたのである。  
 ('Letter to H.: 19 March 1659,' *Hartlib Papers* 51/91B)

他の箇所ではピールは、イギリスを樂園にするというこの主張を、「気取った誇張」と考えて欲しくないと述べる ('Letter to H.: 8 May 1658,' *Hartlib Papers* 52/87A)。それを上の〈開かれた庭〉の構想と重ねよう。すると彼は、庭園を開くことでイギリス全土を風景式庭園にするとうそぶいたウォールポールを、一世紀近く前に先取りしていることになる (Walpole 264, 278)。

とはいえ強調せねばならないのは、ピールの庭園論がほとんど公刊されなかったことである。繰り返せば、それが未だ「異説」にすぎないことは、彼自身よく自覚していた。なるほど公刊されなかったのは、実際には彼の自己韜晦癖、ハートリブの凋落、イーヴリンの気紛れといった偶然によるのかもしれない (Mowl 23)。しかしその事実そのものは重要である。我々はやはり、風景式庭園の誕生に最も大きな直接的影響を及ぼしたのはピールではなく、例えば興隆期のジャーナリズムを利用できたアディソンであったとせねばならない。

## 結

以上見た、ピューリタン革命期におけるハートリブ・サークルの庭園論をまとめよう。

一般に彼らは、公共善へと向かう活動を最も重んずる(広義の)シヴィック・ヒューマニズムに基づき、勤勉な労働による社会改良を呼びかけ、逆に公共善に反する党派性や私利私欲の追求を批判した。その結果、伝統的な〈閉ざされた庭〉は、私利への閉塞を表わす隠喩となりえた。更に彼らは、庭園を公共善へと開かれた有用なものとするべく、庭園を農業に包摂し、それに関する様々な制度的改良を提言した。この改良は、イギリス全土を再興された樂園に化するという(広義の)千年王国論的な構想と結び付いている。その結果、庭園を文字どおり外部へと開き、最終的にはイギリス全土にまで拡大せよという主張もなされる。かくしてハートリブ・サークルは、自然へと〈開かれた庭〉、風景式庭園に至る一つの大きなモメントを提出した。実際、ピールに至っては、半世紀前の風景式庭園論と呼べるものを構想している。

しかし彼らの庭園論には、或る意味で限界もあった。その一つは、彼らが急進派への反動もあって土地私有を肯定し、「囲い込み」を推奨したことに集約される。すなわち彼らは、手付かずの開かれた自然の快に対し必ずしも注意を払わない(なるほど美的な快自体は無視されなかったし [E.g. Blith 124f.; Austen *passim*]、ピールのような例外もあったが)。単純化してい

えば、手付かずの自然の快は彼らの「ピューリタンの」な禁欲的労働倫理とはなじまなかった。それはむしろ、王制復古期のエピキュロス主義的田園文学の中で前面に出るであろう。

もう一つの限界は、革命の頓挫と王制復古によって、彼らの庭園論の多くが出版に至らず、忘却されたことにある。例えばハートリブは、王制復古後、ピューリタン政権から与えられた年金を取り上げられてしまう。その結果、明らかに公刊を意図してまとめられていた『ハートリブ文書』は日の目を見ず、そこに含まれたビールの斬新な庭園論も最近まで注目されることはなかったのである。

とはいえ、ハートリブ・サークルの科学者・庭園論者の多くが後の王立協会会員となることから知られるとおり、彼らの遺産は、王制復古後も直接・間接の形で着実に受け継がれた。その影響は、アディソンを初めとする一八世紀風景式庭園論にも顕著であろう。しかしそれを論ずることは本稿の範囲を逸脱する。

## 注

1 Cf. Thacker 123, 127; 川崎 100-02. ストロングは例えば、「庭園設計の全ては1660年の王政復古に至り初めて再開する」という (Strong 223)。

2 ハートリブ (・サークル) については, Webster, *Hartlib* の他, Turnbull 参照。最近の学際的研究としては, Greengrass, *et al.*, 特に庭園＝農業論に関しては, Leslie, *et al.* 参照。

なお筆者は寡聞にして、本稿執筆の最終段階まで、ハートリブ (・サークル) に関する芳賀、浜林、加用、椎名による邦語文献の存在をほとんど知らなかった。更にピューリタン革命史におけるハートリブ (・サークル) への言及を含めれば、邦語参考文献は膨大になるが、特に重要なものとして、竹内; 田村『ユートピア』, 第一章。またハートリブ・サークルの最も中心的な農業書『彼の遺産』には次の邦訳があるが未見。飯沼二郎訳『彼の遺言——或はブラバント及フランダース農業論』(農林省農業技術研究所調査資料第六号, 1953)。

これら邦語文献の多くは、紹介ないし書誌的研究、あるいは政治思想史に重点があり、美学思想史、具体的にはシヴィック・ヒューマンイズムの庭園論の観点から見る本稿とは、自ずからアプローチが異なる。またそれらは、『ハートリブ文書』を直接には用いていない。

3 ウェブスターの研究は, Webster, *Hartlib* の他, 最も重要な *Instauration*。ただし彼が、革命期の科学運動を狭義の「ピューリタン」に限定した点には批判の余地がある (cf. Mulligan)。実際、ハートリブ・サークルにも王党派・国教会派が含まれている。

4 同文書には書記の筆写による重複が多い。それは同文書が単なる遺構の寄せ集めでなく、公刊を意図して編集されたことを示しているが、引用の際は代表的なもののみ一つ挙げ、重複の有無は示さない。

5 Cf. Webster, *Instauration* 492, *et passim* の他, Hunter 99, *et passim*.

6 この点は, Webster, *Instauration* に詳しい。ベーコンの活動主義と関連文献については取敢ず, 木村参照。ハートリブ・サークルの庭園論に対するベーコンの活動主義の影響に関して例えば, Austen, 'To the Reader' [ ¶ 4v].

7 シヴィック・ヒューマニズムについては, 引用・参考文献に挙げたものを中心とする Pocock の研究参照。ここでポーコックと結び付くシヴィック・ヒューマニズムの概念を用いることには, 筆者自身かなりの躊躇がある。ポーコックの研究はアメリカ革命をテロスとするため, それ以前の歴史記述に強いバイアスが加わっており (それは必ずしも彼の研究の価値を下げないにしても), とりわけシヴィック・ヒューマニズムが「マキャヴェリズム的」(でなければならない) というニュアンスを帯びるからである (e.g. Pocock 350)。その結果ポーコックは, *Oceana* (1656) の Harringtonこそ, 「イギリスにおけるシヴィック・ヒューマニズム思想の真の先駆者」であり (386), それ以前の言説 (含ハートリブ) は, そこからすると不完全だという結論に至る。しかしこれは, シヴィック・ヒューマニズムの概念を相当に狭く取らねば承服できない。この点は, 最近 Peltonen により十分反証された。またマキャヴェリズムの重視が, 一七世紀イギリスの政治思想に関し適切にかついても, 当然多くの疑義がある (e.g. Worden)。

にもかかわらず, 敢えてシヴィック・ヒューマニズムの概念を採るのは, 第一に, それが一八世紀イギリス文化研究で十分な市民権を得ているからであり (cf. 安西「立憲君主制(1)」, 55, 註4), 第二に, それに代わる熟した術語がないからである。確かに, ペルトネン等の「古典的共和主義」(classical republicanism) は, 或る意味で一層適切であろう。しかし「共和主義」は, 君主制を排するという語感を伴う。いうまでもなく, 当時のシヴィック・ヒューマニストや古典的共和主義者は, 君主のない政体としての狭義の「共和制」(いわんや民主制)のみを望んだわけではない。この点で「古典的共和主義」は, 少なくとも日本語では誤解を生みやすい。重要なのは, シヴィック・ヒューマニズムが, 君主制を含む様々な政体に適応可能な言説のタイプだという点である。以下, シヴィック・ヒューマニズムをポーコック的なものに限定せず, そうした柔軟な枠組みと捉えたい。

8 これに関する古典的記述は, ヴェーバー。最近の研究によれば, こうしたエートスは, ピューリタンのみに固有ではなく, 当時の社会一般, 更にはキリスト教ヒューマニズム全体に共有された伝統であった。Cf. Todd, esp. 118-75.

9 ハートリブは次のような千年王国論的と思われる書物を編集・翻訳しているが未見。*Clavis Apocalyptica: Or, A Prophetic Key, by which the Great Mysteries in the Revelation of St. John and the Prophet Daniel are opened. . . Written by a Germane D[oc]tor, and now translated*

[and also edited, by S. H.] out of High Dutch. In *Two Treatises*. . . . With an *Introductory Preface* [by J. Dury]. 1651; 2nd pt. 1651.

10 恐らくハートリブが庇護した Plattes のような農業書を指すのであろう。

11 マカリアを「共和政」国家と見る研究がある（芳賀『社会・経済思想』163）。むろんそこに君主（と貴族）がいる以上、「共和政」の概念を非常に拡大しなければ同意できまい。しかしそうした「混合政体」をよしとし、君主の権限を制限する点、あるいはこの本文の引用にあるように、一種の「抵抗権」を語る点で、共和制を求めるとはいえないまでも、極めてシヴィック・ヒューマニズム的であり、それをハリントンの『オシアナ』の先駆とする同研究の見解には賛成できる。

12 なるほど一般に、これらの間には本質的な矛盾があるともいえよう。しかもその点は、ハートリブら自身、或る程度意識している。例えば、シヴィック・ヒューマニズムとピューリタンの宗教性の関係と解釈しうるものについてハートリブはいう（cf. Pocock 336ff.）。「私は近年、肉体に関わる農夫の役を果たしてきた。すなわち、若干の勤勉の手助けによって公共を満足させ、貧民を救い、共有の富と豊穡な地上の実りを、全ての人に対して増大させようと努めてきた。しかし……これらの追究に私が粉骨砕身するのは、ひとえに来世の事物をよりよく扱い迎えられるために他ならない。そして勤勉に関する私の通信と勧めによって地上の収穫を刈り取る人々が、天上の種子を蒔くことへと喜んで進めるようにするためである」（Hartlib, 'The Preface, To the Reader,' *Spiritual Husbandman* : なお同書は農業書ではなく、Dury による広義の宗教論を中心とする）。更にシヴィック・ヒューマニズムと私的利益の追求との対立も、当然意識されていたであろう。それはしばしば或る改良が、公的利益と私的利益との両方に役立つと主張されるところからも伺える。E.g. Dymock, *Advancement* 4; *id.*, *Husband-man* 7f.; Weston A3r; Child 52.

しかしハートリブらの意図は、明らかにこれらの要素を融合させることにあった。その結果、公共善は神の名の下に追求され、私的利益は公共善と背反しない限りでのみ許容されたのである。実際、私的利益のみを追求することは、繰り返し批判されている。E.g. Dymock, *Advancement* 4ff.; Weston A3r.; Anon. 3. この融合を示すものとして、ハートリブ・サークルのデュアリによる次の定義を挙げることができよう。「公共善とは、神の生におけるあらゆる人の、普遍的な私的善以外のなにものでもない」（Dury 99）。更に Stubbs II, 362.

13 レヴェラーズ（水平派・平等派）、ディガーズ（真のレヴェラーズを自称した）についての文献は無数にあるが、簡便には、ホロレンショー。同書はハートリブとディガーズの基本的な近さを指摘する（58f.）。そのこと自体は正しいが、しかし後に見るように、両者は囲い込みと土地私有への態度に関して決定的に異なる。

14 そして王政復古以降の科学革命を支えることになるのも、宗派的対立を容認・超越しようとする、いわゆる「広教主義」(latitudinarianism)であった。広教主義については例えば、ジェイコブ。

15 下の「閉ざされた庭」「封ぜられた泉」を含め、安西「〈閉ざされた庭〉から」。

16 本文で挙げるものの他、Plattes A3r-[A4r]; 'Memorandum on the Advantages of Enclosure; Dymock '20 July 1649,' *Hartlib Papers* 64/18/1B. 更に下註21。なおイギリス(ブリテン島)を樂園と見る修辞自体は、非常に古くからある(cf. Bennett)。例えば、Shakespeare, *Richard II* (1595)では、イギリスが「第二のエデン、地上のパラダイス」「海に囲まれた庭」とされる(第二幕・第一場、第三幕・第四場)。

17 ベーコンは *Essays* 中の有名な 'Of Gardens' (1625)において、できる限り「自然の荒野」(a natural wildness)に近く造られた「ヒース」の導入を説いている。Cf. ベーコン 207 (訳文変更)。またマーヴェルは、なかんずく詩 'The Mower agarnst Gardens' (ca. 1652)において、自然に改変を加え閉じ込める庭園の倒錯を揶揄している。Cf. マーヴェル 218-20。ただしこの詩が出版されるのは、1681年になってからである。

18 ただし最近の研究は別である。特に Goodchild 参照。更に, Mowl; Leslie and Raylor, 151-72; Greengrass, *et al.*, 321-42 (なおこの一節全体は、同書 357-64にリプリントされている)。

19 恐らくこれは、整形的・マニエリスム的な華美な水仕掛 (giocchi d'acqua)・噴水等がないことを示唆しているのであろう。

20 イーヴリンの未刊の書物 *Elysium Britannicum* を指すと思われる。ビールが先述の『悦楽の庭園』を初めとする庭園論の公刊を断念したのは、イーヴリンのこの書物の構想を知ったからという。イーヴリンはビールのこの一節全体を、(多少修正し)『ブリタニカの樂園』に収録する予定であった。Cf. Mowl; Goodchild; Leslie and Raylor, 130-50.

21 E.g. 'Letter to H.: 8 May 1658,' *Hartlib Papers* 52/87A, 52/96B; 'John Beale & Others to H.: May 1658-June 1658,' *ibid.*, 52/78A, 52/84A, 52/85A.

## 引用・参考文献

[Anon.] *A Designe for Plentie, By an Universall Planting of Fruit-Trees: Tendred by some Well-wishers to the Publick.* Ed. Hartlib. London, 1652.

安西信一「シヴィック・ヒューマニズムとエピキュロス主義——王制復古以降の一七世紀イギリス庭園論」.『人間文化研究』(広島大学総合科学部),第7巻(1998),原稿受理済。

——。「〈開かれた庭〉の終焉」.『地域文化研究』(広島大学総合科学部),第20巻(1994),177-

211.

——。「庭園の立憲君主制——アディソンの庭園論におけるブルジョアのシヴィック・ヒューマニズムと相乗的關係化の美学(1)/(2)」。同前, 第22巻 (1996), 35-63/第23巻 (1997), 35-69.

——。「〈閉ざされた庭〉から〈開かれた庭〉へ」。『芸術文化』(東北芸術文化学会), 第3号 (1998), 43-56.

Austen, Ralph. *A Treatise of Fruit = Trees . . . Together with The Spirituall Use of an Orchard: . . .* [1653]. Rpt. New York: Garland, 1982.

ベーコン [ , フランシス] 渡辺義雄訳『ベーコン随想集』 岩波文庫, 1983.

[Beale, John.] *Herefordshire Orchards, A Pattern For all England. Written in an Epistolary Address to Samuel Hartlib Esq; By I. B.* London, 1657.

Bennett, Josephine Waters. 'Britain among the Fortunate Isles.' *Studies in Philology*, Vol. 53 (1920), 114-40.

Blieth, Walter. *The English Improver, Or a New Survey of Husbandry.* London, 1649.

[Child, Robert, et al.] *Samuel Hartlib, His Legacie: Or An Enlargement of the Discourse of Husbandry Used in Brabant & Flaunders: Wherein are bequeathed to the Commonwealth of England, more Outlandish and Domestick Experiments and Secrets, in Reference to Universall Husbandry.* The Second Edition augmented with an Appendix. Ed. and pref. Hartlib. London, 1652.

Dury, John. *A Motion Tending to the Publick Good of This Age* [1642]. Rpt. Webster, *Hartlib* 97-110.

[Dymock, Cressy.] *An Essay for Advancement of Husbandry-Learning: Or Propositions for the Errecting Colledge of Husbandry: And In order thereunto, for the Taking in of Pupills or Apprenties. And also Friends or Fellows of the Same Colledge or Society.* Ed. and pref. Hartlib. London, 1651.

[——.] *The Reformed Husband-man; Or A Brief Treatise of the Errors, Defects, and Inconveniencies of our English Husbandry, in Ploughing and Sowing for Corn; With The Reasons and general Remedies; and a large, yet faithful Offer or Undertaking for the Benefit of them that will joyn in this good and publick Work: Imparted some Years ago to Mr. Samuel Hartlib; And now by him re-imperted to all ingenious Englishmen, that are willing to advance the Prosperity, Wealth and Plenty of their native Country.* Ed. and pref. Hartlib. London, 1651.



- Goodchild, Peter H. “No Phantasticall Utopia, but a Reall Place”. John Evelyn, John Beale and Backbury Hill, Herefordshire.’ *Garden History*, 19 (1991), 106-27.
- Greengrass, Mark, Michael Leslie, and Timothy Raylor, eds. *Samuel Hartlib and Universal Reformation: Studies in Intellectual Communication*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994.
- 芳賀守『イギリス革命期の社会・経済思想——教育思想を中心に』 第三出版, 1980. 第四  
「サミュエル・ハートリブの社会・経済思想」, 131-250.
- . 『イギリス革命期の農業思想——S. ハートリブの関わった農書研究』 八朔社, 1992.
- 浜林正夫「サミュエル・ハートリブにおける政治と経済と宗教」. 『一橋論叢』. 第44巻・第6  
号 (1960), 771-88.
- . 「サミュエル・ハートリブの生涯と著作」. 『商学討究』, 第11巻・第3・4号 (1961),  
103-20.
- . 「ミルトンの教育論とその周辺」. 平井正穂編『ミルトンのその時代』 研究社, 1974.  
107-30, 特に109-13.
- Hartlib, Samuel. *A Description of the Famous Kingdome of Macaria; shewing its Excellent Government: wherein The Inhabitants live in great Prosperity, Health and Happinesse; the King obeyed, the Nobles honoured; and all Good Men respected, Vice punished, and Vertue rewarded. An Example to other Nations. In a Dialogue between a Schollar and a Traveller*. 1641. Rpt. Webster, Hartlib 79-90.
- , ed. *The Reformed Spiritual Husbandman: With an Humble Memorandum concerning Chelsy Colledge*. London, 1652.
- The Hartlib Papers: A Complete Text and Image Database of the Papers of Samuel Hartlib (c. 1600-1662), Held in Sheffield University Library, Sheffield, England*. Ann Arbor: UMI, 1995.
- ホロレンショー, ヘンリー 佐々木専三訳『レヴェラーズとイギリス革命』 未来社, 1964.
- Hunter, Michael. *Science and Society in Restoration England*. Cambridge: Cambridge University Press, 1981.
- ジェイコブ, マーガレット 中島秀人訳『ニュートン主義者とイギリス革命1689-1720』〔原著  
1976〕 学術書房, 1990.
- 川崎寿彦『楽園と庭——イギリス市民社会の成立』 中公新書, 1984.
- 加用信文「リチャード＝ウェストン『プラバントおよびフランダーズ農業論』考」／「同再  
考」. 『農業総合研究』（農業総合研究所）, 第19巻・第3号 (1965), 189-229／第21巻・

- 第3号 (1967), 195-224.
- 木村俊道「フランス・バイコンと〈活動的生活 (vita activa) 論〉」, 『東京都立大学法学会雑誌』, 第37巻・第1号 (1996), 171-246.
- 岩井淳『千年王国を夢見た革命——17世紀英米のピューリタン』 講談社, 1995.
- Leslie, Michael and Timothy Raylor, eds. *Culture and Cultivation in Early Modern England: Writing and the Land*. Leicester: Leicester University Press, 1992.
- マーヴェル, アンドルー 吉村伸夫訳『マーヴェル詩集』 山口書店, 1989.
- 松川七郎『ウィリアム・ペティ——その政治算術=解剖の生成に関する一研究〔増補版〕』 岩波書店, 1967.
- Milton, John. *Of Education* (1644), 'To Master Samuel Hartlib.' *Complete Prose Works of John Milton*. Ed. Wolfe. New Haven, 1953.
- Mowl, Timothy. 'New Science, Old Order: The Gardens of the Great Rebellion.' *Journal of Garden History*, Vol. 13 (1993), 16-35.
- Mulligan, Lotte. 'Puritans and English Science: A Critique of Webster.' *ISIS*, Vol 71, No. 258 (1980), 456-69.
- Peltonen, Markku. *Classical Humanism and Republicanism in English Political Thought 1570-1640*. Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- [Plattes, Gabriel.] *A Discoverie of Infinite Treasure hidden since the Worlds Beginning, Whereunto all Men, of what Degree soever, are friendly invited to be Shares with the Discouser* G.P. London, 1639.
- Pocock, J.G.A. *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition*. Princeton: Princeton University Press, 1975.
- Price, Sir Uvedale. *An Essay on the Picturesque*. London, 1794.
- Shaftsbury, Anthony Ashley Cooper, Third Earl of. *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times* [1711]. Rpt. Hildesheim: Olms, 1978.
- 椎名重明「イギリス農学史における十六世紀と十七世紀 (市民革命まで) (一) / (二)」, 『農業経済研究』 (農業経済学会), 第28巻・第1号 (1956), 29-43 / 第28巻・第2号 (1956), 107-125.
- Sidney, Sir Philip. *An Apology for Poetry*. Ed. Shepherd. London, 1965.
- Strong, Roy. *The Renaissance Garden in England*. London: Thames and Hudson, 1979.
- Stubbs, Mayling. 'John Beale, Philosophical Gardener of Herefordshire: Part I. Prelude to the Royal Society (1608-1663). / Part II. The Improvement of Agriculture and Trade in the

- Royal Society (1663-1683). *Annals of Science*, Vol. 39 (1982), 463-89; Vol. 46 (1989), 323-63.
- Switzer, Stephen. *Nobleman, Gentleman, and Gardener's Recreation* [1715]. In *Ichnographia Rustica* [1718]. Rpt. New York: Garland, 1982.
- 竹内幹敏「農業改良と反独占運動における資本主義の精神」, 水田洋編『増補・イギリス革命——思想的な研究』 1958; 新装版・御茶の水書房, 1991. 第二章, 41-96.
- 田村秀夫編著『イギリス革命と千年王国』 同文館, 1990.
- . 『イギリス革命とユートピア』 創文社, 1975. 特に第一章, 13-53.
- Thacker, Christopher. *The Genius of Gardening: The History of Gardens in Britain and Ireland*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1994.
- Todd, Margo. *Christian Humanism and the Puritan Social Order*. Cambridge: Cambridge University Press, 1987.
- Turnbull, G. H. *Samuel Hartlib: A Sketch of his Life and his Relations to J. A. Comenius*. London: Oxford University Press, 1920.
- [Weston, Sir Richard.] *A Discourse of Husbandrie Used in Brabant and Flanders: Shewing the Wonderful Improvement of Land there; and Serving as a Pattern for our Practice in this Common-Wealth*. Ed. and pref. Hartlib. 2nd. ed. London, 1652.
- Webster, Charles, ed and intro. *Samuel Hartlib and the Advancement of Learning*. London: Cambridge University Press, 1970.
- . *The Great Instauration: Science, Medicine and Reform, 1626-1660*. New York: Holmes & Meier, 1975.
- ヴェーバー, マックス. 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 岩波文庫, 1989.
- Wooton, Henry. *The Elements of Architecture* [1624]. Rpt. Farnborough, Hants.: Gregg 1969.
- Worden, Blair. 'Classical Republicanism and the Puritan Revolution.' *History and Imagination: Essays in Honour of H. R. Trevor-Roper*. Ed. Hugh Lloyd-Jones, Valerie Pearl, and Blair Worden. London: Gerard Duckworth, 1981.

(※本稿執筆に際し、広島大学総合科学部・友田卓爾教授、同法学部・山田園子教授、同経済学部・長尾伸一助教授より有益な批判・助言を賜わった。勿論、誤りは全て筆者の責任である。)

Britain as the Restored Eden: Action, Improvement, and Expansion  
in the Garden Theories of the Hartlib Circle, 1640-1660

Shin-ichi ANZAI

It is a commonplace in the histories of the garden that the Puritan Revolution (1642-60) was an era of complete destruction of gardens. This period produced, however, not only a considerable number of gardens, but also numerous books and tracts on gardening (in a broad sense). This paper focuses on these garden theories, especially those by the Hartlib circle, whose manuscripts have been newly published. It is the author's conclusion that an important moment towards the English landscape garden, which emerged at the beginning of the 18th century with the opening up of the traditional 'enclosed garden' onto free nature, had already been posited during this very Revolution.

Samuel Hartlib (c. 1600-62) was the epicentre of the Scientific Revolution then under way in Britain, leaving an unquestionable influence on Restoration (1660) science. He and his circle earnestly demanded actions towards social reformation intended for the public good, on the basis of 'civic humanism'. Accordingly, the traditional type of the 'enclosed garden' became a metaphor for the confinement into the exclusive pursuit of private interests and factionality. On the contrary, they insisted on 'opening' the garden towards the public good by making it a branch of profitable husbandry. Finally, their proposals for agricultural and horticultural improvement led to the millenarian demand that the whole of Britain should be actually restored as the second Eden or God's Paradise by expanding or annihilating the borders of every existing garden. In fact, at least one member of the circle, John Beale, advocated a kind of the landscape garden.

But, their views had certain limits. Firstly, reacting against the communist Puritan radicals, they urged the 'enclosure' of waste land and the commons, with the result that they were almost indifferent to the aesthetic pleasure of open nature or wilderness itself; such pleasure was obviously incompatible with their 'Protestant work-ethic', and would not come to the fore until the advent of Restoration Epicurean rural literature. Secondly, with the collapse of Puritan hegemony itself, the main part of their ideas sank into oblivion.

Nevertheless, the circle's legacy formed a strong undercurrent after the Restoration, helping to bring into reality the open landscape garden.